

助の内は津太夫(法善寺)か、呂太夫が語つたといふ仕儀です。されば三、四段目は聲によつて有無相通するといふのが、今日での正當な解釋でせう。

今一例は住太夫といふのは、世話物のうまかつた太夫だが、非力で聲がないから壬生村を語る。呂太夫が勘兵衛とりてを語るといふ風です。

五、三味線欄の讀み方

前回までの四回で、太夫の位置、番付における太夫、番付を通しての太夫を説きましたが、今度は番付に表はれたる三味線について述べませう。

この稿の初めに申しましたやうに、三味線は、當初はほんに輕視されてゐた。又義太夫初期の三味線は、今日のやうに「手」のこんだものでなく、ツンとかテンとか、ほんの伴奏に過ぎなかつた。例へば今日の浪花節の三味線位が關の山で、従つて三味線に重きを置く必要がなかつた。太夫あつての三味線太夫が亭主ならば三味線は女房役、しかも女權の極めて低いものでした。されば、初めに掲げた享保十八年といふ今日での最古の番付には三味線の名が出てゐません。これが二枚番付となつた一例を「忠臣藏」の初演番付に見ましようが、その寛延年間においてすら、三味線は隅の方に四人の名が出てゐるに

過ぎませんでしたのが、三味線にも名人が出て、その権力が段々と伸長され、今日見るが如く、「三味線」といふ一欄が出来るやうになりました。口繪に掲げたのは文樂座の昭和六年十一月興行の「番付」ですが、これが全三味線欄で、即ちこれが現在における文樂座の三味線の位置をこの一欄において、明示してゐるわけです。

ところで三味線の位置をお話する前に、今日の「三味線」に三種の身分が、番付に書き現はしてあります。即ち三味線の元祖は竹澤權右衛門であつた。その流れが何れも「澤」の一字を付けてゐます。

竹澤、鶴澤、豊澤、野澤、花澤と、何れも「澤」のついた「曲名」です。——斯道では「曲名」といふことは藝名を指していふのです。「曲」の文字に拘泥して、素人の若い人は淨るりのことと解してゐる向きもありますが、「曲名」は藝名の意味です。で、この「澤」の字を書分けて、身分によつて三通りに使つてゐます。

「澤」——本ザハといふ。

「澤」——中ザハ、或は半ザハといふ。

「沢」——假名ザハといふ。

ので、本ザハが一番いゝ三味線、次が中ザハで、身分の輕いのが假名ザハであるといふのが、今日の習

慣です。口繪の「澤」の字を注視して下さい。

ところが、昔はこんな面倒なことではなく、皆が、かなザハの「サハ」です。例へば元文の竹本座の番付を見ても寶曆年間のを見ても、盡くが假名「ザハ」です。最も「大西」などいふ三味線の流派がありましたから、こんな區別は無意義であつた。尙時代が下つて、文政天保時代の「文樂茶店」の墨印のある頃の「いなりの芝居」の番付を見ても「假名ザハ」ばかりです。ところが、試みに明治元辰二月の「いなりの芝居」の番付を見ますと「澤」と「半ザハ」とがハッキリと使ひ分けられてゐます。

一寸中言ですが、近頃若い人が「人形淨るり」を論じ「文樂座」の紀元をとかく詮議するに、當らざる説が多いのです。ハッキリと茲に申上げておきますと、「文樂座」といふ座名の出來たのは、明治五年の正月松島へいなり社内から人形淨るりが引越した時に、「文樂座」といふ座が出來たのです。その以前はいなりの芝居で、文樂座といふものはない。いなりの芝居を、植村文樂軒が興行してゐたといふ關係です。この植村文樂軒と文樂座の關係は後に述べませうが、「文樂座」といふものが、古い由緒のあるものゝ如く誤解してゐる人々のために一寸注意しておきます。

こんな次第を経てゐますから、「中ザハ」即ち「半ザハ」の發生は極く近いことです。寫眞の番付に見る友二、寛市の如きが即ち「半ザハ」です。

元へ話を返へして、一體に番付面を見るには、番付全體の内側にある太い黒い線を大切なものとしてをります。そして三味線欄でいふと、上と左に現はれてゐる太い線——太い枠が大切な輪廓となつてゐる。右は二重の線で、語り物との境界が付けられてゐる。この眞先きに——即ち筆初めの右から位置を定めて行くのですが、こゝに掲げた今日の「三味線」では、筆頭の鶴澤友次郎が一番の最上位を占めてゐるのです。そして友次郎は、前に二重の線、次に二重線を以て箱に圍まれてゐますから、これが即ち「三味線」の紋下といふことを現はしてゐます。が、私の解釋は紋下或は櫓下は既にも説きましたやうに、番付の初行、その定紋の下にあつてこそその「紋下」です。この意味においての紋下は、淨るりあつて以來の初めての三味線紋下は豊澤團平(二代)、次に豊澤廣助(五代目)の二人限りです。次に名庭絃阿彌、野澤吉兵衛、鶴澤友次郎と三人が紋下であるといひますが、いはゞ「三味線欄」の「三味線の世界」の紋下格といふ言葉を用ふるのが妥當ぢやあるまいかと思ひます。然らずば、何故紋下のほんとの位置に坐らないか、坐ると尻のこそばさを感じるだけ、紋下の名は潜稱ぢやありませんまいか。

それはとにかくとして、筆頭の「箱」にゐる友次郎が最上の位置で紋下格、次は「筆下」の最後に(太い枠内を注意して下さい)箱の内に入つてゐる、豊澤新左衛門が第二位です。こゝで前述の太い線——太い本欄の輪廓が轟しい區別をつけてゐるのです。本欄の外にも尙二枚の三味線がゐます。即ち仙糸、

吉彌がそれですが、これは本欄でないのです。本欄の最後の「箱」の新左衛門が第二位と分る。

次は又筆頭——或は筆上にゐる鶴澤叶です。この叶と筆上二枚目の廣助との間が少し間が明けてありますから、これで叶の位置が高上してゐます。

次に「上二枚目」の廣助が順でこれを「筆上二枚」とも、又「花」ともいひます。

次が「下二枚」即ち「筆下二枚」の豊澤清六の順、でこれを「止」といひます。「花」と「止」との位置はほと同じで、次が中軸の團六、歌助、この中軸の左右を廣げて空間をとると、この中軸の位置が、「花」よりも「止」よりも上になるのです。

次は上、下、ヒ、下とちどりに綾にとつて順が付いてゐます。くどくしいやうですが、これだけの事がお分りにならぬと、三味線を聴いても、その腕はまづ理解しても、その位置が分かりません。

これを本則としてどうにもこのうちへ、入れるに入れられぬ三味線があります。例へば新左衛門の名の次が本欄の粹で、その次にハミ出されてゐる豊澤仙糸——まづ道行の三味線ならば當今の文樂座の名手でせうが、義太夫の三味線としては、腕が弱いといふので位置が付けられぬため、粹外に出ています。野澤吉彌は仙糸とは、理由を異にしますが、他との比較上困るので別にして見てよろしい。

ところで、今一つ「太夫の部」でもいひましたが、大隅太夫の傍の道八、津太夫の傍の綱造、土佐太

夫の傍に吉兵衛とゐまして、三味線の仲間とは没交渉の顔をしてゐます。これは吉彌の場合の如く、本欄に收めると他との釣合がとり悪いといふので、欄外ばかりでもあるまいといふので、各自の太夫の傍に坐らしてゐます。——と一應は解釋しますが、その太夫傍の三味線の名の上に「三味線」の三字を書いてあると、ないとは大變な格式に相異があります。

この前、私は、これは「顔」の如何によるのであると簡単に太夫の部で説明しましたが、この三味線の部では、その原則故實を明記しておきませう。即ち名の上に三味線と書ける資格は、「日本因會の顔付」で、三味線上八枚だけが持つ特權です。

因會いんかいの事は改めて後に記しますが、因會の顔付といふのは年一度(毎年十二月二十五日)生國魂神社内の淨るり神社に參詣した後で催さるゝ因會の總會で發表しますが、これは太夫と三味線とで各々に資格がある。即ち

太夫——太夫 古老 中老 平人 掛切

三味線——三味線 古老 中老 平人 掛切

と、各々五階級に分れてゐます。

この故實でお判りの如く昭和四年度の因會顔付に、道八、吉兵衛は、「三味線上八枚」の人ですから、

名頭に「三味線」と書き、書かないのは腕はいかにも若いに似ぬ天才ですが、顔が若いから三味線と書けないのです。尤も、この道八は實は「三味線上八枚」の資格はないから、「三味線」とは書けぬ筈ですが、三味線上八枚格になつてゐる。これが先年道八の文樂座入りに大騒動の持上つた所以です。

三味線上八枚といふと、因會の顔付の「三味線」の上から八人を數へるのです。ところで、この顔付の「古老以上」になると、本欄にゐても名頭に「三味線」の三字を書きます。寫眞に示した紋下の友次郎、新左衛門、叶、仙糸が即ち因會では「古老」以上の顔ですから、本欄にあつて、しかも「三味線」とその名頭に書いてあります。

今一つ「太夫付」といふ、本欄を抜けて太夫の傍にあるのは、相當の優遇である。今少しく細かしくくゞくしいやうですが、故實をいふと、――

「太夫付」の三味線で「三味線」の三字を名頭に書くにして、上から書き初めるのは、前に申した「三味線上八枚」しか絶対に許さぬのが故實。七分目あたりから「三味線」の「三」の字を書き始めるのが、「古老」の顔付の人。五分どころの中途から「三」の字を書くのは「中老の頭五枚」といふのが、嚴格なる「三味線」の書きかたですが、今日はもうそんなことは廢たれて、道八の如きが「三味線上八枚」の故實を破つて、その位置にあらずして「上八枚」の待遇を受けてゐます。

私どもにいはすと、こんな故實は詰らぬ死物だと思ふなら、全然廢して腕一方の相撲のやうな番付でいゝが、故實を存するならば嚴然と存し、人によつての情實を捨てるがよろしい。

道八が、何故に問題になつたかといふと、道八は中途稼業(芝居の)を休み、稽古屋一方の師匠となつた人である。そして因會を脱會した人であるがために、その資格がついてゐなかつたのです。それが問題となつたのですが、情實因縁は、今日の如く道八は因會の故實を踏みにつつてゐます。

昔、古靱太夫の太夫付となつてゐた鶴澤清六は、顔の順からいへば、當時の筆上五枚目あたり、芳之助の次位の人ですから、あの腕の強さを優待されて太夫付になつてゐましたが、三味線とは書いてない。

なか／＼この顔付といふものは露ましいもので、例へば太夫でも三味線でも「中老」にならなければ自分の弟子でも門人とはいへない。「中老」の位置を得て初めて門人なにかしといはせる。樂屋で座布團の敷けるのも、この「中老」以上です。「中老」の下といふと「平人」です。人形淨りでは「平人」は殆んど人格さへも認められないのです。でも、「平人」でも弟子はあります。これは自分の弟子ながら「預り弟子」と稱へねばなりません。

前に「三味線上八枚」といふことで、最上の位置であることを申したが、それと同じく「太夫上八枚」といふのも又最上の太夫の位置を申します。だからこの裏からいふと、紋下の太夫は必ず「因會の

顔付」で太夫上八枚の位置の人でなければならぬが、茲に一つの異例を作つたのは、例の名人團平で、團平は可なりの進んだ頭を持つてゐた人だつたと見えるのは、彦六座で、住太夫が抜けたあとで、組太夫と大隅太夫(先代)とを交代の紋下にしようといふのが團平の説であつた。ところが當時の大隅太夫は「古老」であつて、「太夫上八枚」にはなつてゐなかつたので、大隅太夫の紋下には反對者があつたのでしたが、その時の團平の曰くに、「太夫上八枚」の適當なる人があるのを排するならばよくあるまいが、その人がない。私が大隅をと見立てたのに何が悪い理由を聞かうといふのであつたが、因會が當時の團平の腕には、二の句がつけず。大隅太夫と組太夫と打つてちがひに紋下となつてゐた。故に古來「古老」で「紋下」となつたのは、蓋し大隅太夫一人である。團平が組太夫を疎外したのは、組太夫の賭博好きが祟つたのです。

六、人形遣ひ位置の讀み方

文樂座の紋下に太夫、三絃、人形と、三紋下を初めて連名にしたのを明治十六年四月の松島における文樂座興行からであると、私はこの稿の第一回に述べましたが、その後「豊澤團平傳」を取調べてゐるうちに三味線が紋下になつたについての曲折の一つを知ることが出來たので、この件を再説しますと、